

近世和歌と定家

安 田 章 生

初 め に

いかなる歌人も、各時代を通じて、あるいは個々の鑑賞者を通じて、同質、同等の評価を受けるといふことはあり得ない。その評価は、鑑賞者によつて微妙に異なるばかりではなく、時代によつてもまた、しばしば大きく変遷するのである。藤原定家は、有名であるにもかかわらず、その本質的な理解という点においては、和歌史上最も不遇な歌人であろうと私は見ているが、定家が理解せられることのとくに乏しかったのが、近世、近代であったことは、改めて述べるまでもないであろう。およそ、定家とは反対の方向を歩んだ近世和歌あるいは近代短歌の世界において、そうした現象が見られたことに、何の不思議もないのであるが、そこには、やはり、定家そのひとの文学的価値というよりも、むしろ、その時代の性格が顕著にうかがえるといえるのである。批評することとは、つねに批評されることに通じることだからである。定家というきわやかな個性をいかに受容したかということを通して、定家以後の和歌史——中世、近世、近代という和歌史上の時代は、それぞれの時代の性格を、われわれに見せているのでもある。さて、本小論では、近世和歌が定家をいかに受容したかという点について、一つの展望を与えてみたいと思う。

中世歌学を打破するところから出発した近世和歌において、定家は、讚美されると否定されるところを問わず、新しく自由な目でもつて見直されている。近世歌学の先端を切つた戸田茂睡は、

……これみな定家卿の名歌の五文字なれば私の歌に置くべからずといふ。かやうなる五文字は家隆卿の歌にいか程もあれども、それをば一つも言はず。定家を丸・業平・貫之に比して貴みいふ二条家の私事なるべし。一条禅閣兼良公などは定家卿をすぐれたる名人とも思召さぬことなり。後鳥羽院・順徳院も、歌の詠みやう好からぬやうに思召したる様子なり。新古今時代の名人たち皆死に果て給ひしあとに、定家卿一人生き残り、人に用ひられ、為家・為氏・為世と代々相続ゆゑ、定家卿のことを上古中古にもこれなき名人堪能、詠み給ふ歌は聞えぬことをも無理にことわりをつけ、かやうなるも歌の一体と、皆秀逸の歌に言ひなしたることぞと思はれ侍るといふ人もあり。……（『梨本集』）

と述べて、定家を權威の座からおろし、賀茂真淵は、定家の歌は否定しながら、その歌論については敬意を表して、……その中にも定家卿は父卿にもまされり。この卿の書き残せし言葉、いささかもあだなることなく、今日に至りて歌作り習ふ人は、大空の月のごとく仰ぎ貴み侍るもうべなるかな。この卿、衣笠内府の毎月の百首につきて申し贈り給ひし文など今の世の歌作る式とも謂ふべし。詠歌大概なども、これに同じくこの卿の本風なるべし。さるをいかなればぬしの詠み給ひし歌とて拾遺愚草などいふものはこの教へ給ひし則には違ひけん。ひとへにむつかしくて古への歌のさまとは遙かにつかぬことのみにぞありける。それをよしとは自らも思ひ給はざりしにや。新古今・新勅撰にもえらび入れられざりしか。あしと思ししながら家の集には載せられしより、後の歌作り習ふ人のまどひぐさとなれるなるべし。（『古風小言』）

と述べているのである。さらに、本居宣長になると、真淵とは反対に、定家の歌学を認めず、歌を認めているのであるが、そのように定家に対して肯定的な批評をしたものも、真の理解はしていなかつたように考えられる。そうした点について、以下、述べていくこととする。

定家の「駒とめて」の歌をめぐる評価

定家に対する多くの人びとの理解のほどがよくわかる都合のいい例をあげてみたい。それは、定家の次の歌に

ついでに鑑賞である。

駒とめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

この歌は、周知のとおり、『万葉集』の「苦しくも降り来る雨か神の崎狭野のわたりに家もあらなくに」(長奥磨)を本歌としている作品である。さて、近世の歌人ないし歌学者たちは、この歌について次のように鑑賞している。

(一)、本歌と同様に実感を汲み取る鑑賞

本居宣長『新古今集美濃の家つと』

いとめでたし、万葉三に、「くるしくもふりくる雨かみわが崎きのわたりに家もあらなくに」といふをとりてそのくるしくもふりくるといへると、家もあらなくにといへるとを、袖うちはらふかげもなしとよみなされたる、一きはつよく、意もせちなり、其のうへ夕暮とあれば、まして宿かるべき家のなき意詞の外にあり、近き比、万葉風をのみ、ひたすらたふとむ輩の、後の歌をば、しひていひおとさむとて、此歌のこととかく論じたることあれど、かたおちのしひごととなり、袖うちはらふ陰もなしといへるに、くるしき心も、家のなき心も、あくまでそなはりて、いといと哀なる物をや。

石原正明『尾張廻家苞』

万葉三にくるしくもふりくるあめかみわがさきさのわたりにいへもあらなくにといふを取りて、其のくるしくもふりくるといへると〇これは一首のうへにて、聞ゆる余情也。本歌の詞の故にはあらず、家もあらなくにといへるとを袖うちはらふかげもなしとよみなされたる〇陰といひて家といはざるは羈旅の歌にあらぬ故なり。一きはつよく心もせち也。其のうへ夕暮とあればまして宿かるべき家のなき意詞の外にあり〇此の歌旅行の歌にあらず、夕暮といひても宿かる意はなし、夕暮は折りからのわびしき也、晴れたる日かりそめに物へ行きてかへるさに俄かに雪にあひし也、雨衣などの心しらひもなきに袖はらふとて立ちよるべき陰もなくなどしてわびしき状を尽したる也。

(二)、大体において、実感を汲み取らない鑑賞

賀茂真淵『国歌論臆説』

定家卿、「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」、これは万葉に「苦しくもふり来る雨かみわの崎狭野のわたりに家もあらなくに」といふ歌に本づかれたるに、古歌はいかにも苦しかるべく聞ゆるを、「雪の夕暮」の歌は勝れてよろしいふにとりてぞ、そらぞらしきこちするなり。

田安宗武『臆説剩言』

かの定家卿の

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

と詠まれし歌は、さるあはれ身に知りたる人だにも、此の歌をきかんに面白き心地のみして、佐野のわたりの雪のけしき見まほしくおもふべかめり。ましてやんごとなきあたりには、さるあはれなることわざ見給ひもだにし給はねば、かの歌を聞しめしては、さあらん事うらやましなど思して、おほんたからを憐み給ふ御心もゆるみてんかし。されば、はかなくいひ出でたるやうなる中に、人の心を和らぐべきと却りてわざはひとなるべきとのあれば、それをよくよくえらみ用ふべきことにこそ。

賀茂真淵『再奉答金吾君書』

「駒とめて袖うち払ふかげもなし」といふ歌につきて、此のけしきのおもしろきにやんごとなきあたりには却りて民をうらやみ給ふ御心出で来て、あはれみ給ふ御心もゆるみてんかしと、物ごとに御心つけ給ひて世をおぼすなるは、いとかたじけなき御事に承りぬ。

田安宗武『歌論』

華がちになりもて行きて、歌の心を失ひつること多し。まづその端をあげいはんには、万葉集に、

苦しくもふりくる雨か三輪が崎狭野のわたりに家もあらなくに

とあるを定家卿のこれによりて、

駒とめて袖うちらはらふかげもなしきのわたりの雪の夕暮
と詠まれたり。初の歌は遠の旅人のあはれもふかく聞ゆるに、定家卿のかの歌はいと苦しげにもなくおもしろげにぞ聞ゆる。くはしくは臆説剩言にいへるが如し。

同『歌体約言』

賀茂真淵がいひけらく、「古歌に、苦しくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに、とよみたるは、誠に旅行く人のあはれき、うち聞きたるだに身にしむばかりおぼゆるに、後の世の人々の歌をもて、駒とめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮、とよみて待るは、よき歌といふにつけてはそらぞらしきやうにおぼゆ」と、実にさることにて、苦し気には聞えでかへりて佐野のわたりの雪の夕暮見まほしきまでぞおぼゆる。されど、などさる人けとほき渡の雪のくれおもしろきことや待るべき。かく苦しき事をもおもしろきやうによみ侍ること、おほきなる人の害ともなり侍りぬべき。さてこそ罪なうして配所の月を見んなど、ひがひがしき心も出で来し人おほくさへなれるなるべし。

八田知紀『調の直路』

この歌を懸居翁の評して、此の歌うち誦じて見るに、あはれなる風致なく、かの佐野のわたりに家もあらなくといふ本歌とは、雲泥のたがひありといはれたる、まことにさることなるべし。袖うちはらふかげもなしといへるに、雪中の苦しきさまはあくまでこもりてはあれども、そはことわれるのみにて、一首の調、かの本歌とは同日にいふべからず。

右の定家の作品は、「定家は本歌の心を取りて詠むことはなきなり。家隆は本歌と同じ心なる歌のまま見え侍るなり。」（『正徹物語』）といわれたように、本歌の詞句は取つていても、心は取つていないと見るべき作品で、作者の実感を汲み取らない鑑賞が正しいと思われる。近世において『新古今集』を愛好し推賞した宣長や正明らの鑑賞が、右の歌から実感を汲み取り、『新古今集』を愛好しなかつた真淵や宗武らの鑑賞が、その反対であつたということは皮肉なことであるが、宣長や正明の理解の程度がこの程度のものであつたといふところに、

近世における『新古今集』ないしは定家理解の浅さが露呈しているわけでもある。また、実感を汲み取らないという、その段階までは的確な鑑賞をしている真淵や宗武は、その故を以て、低く評価しているのであつて、古代和歌の基準で定家の歌を裁断した結果となつていゝといえよう。なお、知紀の鑑賞は、真淵の評に賛成しながらも「苦しきさまはあくまでこもりてはあれども」と認め、また「それはことわれるのみにて」といつているので、不徹底であるといわねばならない。

以上、定家の歌一首についての鑑賞が示しているところは、近世における定家理解の限界を象徴的に示している結果となつていゝといふべきである。

宣長と定家

近世において、定家を尊敬することの最も深かつたのは、本居宣長であつた。

……さてその名人の中にも、定家卿ことにすぐれ給へり。されば俊成卿の子息といひ、ことに哥も父よりなほすぐれて、他人の及ばぬ処をよみ出で給ふ故に、天下こそつてあふぐことならびなし。まことに古今独歩の人にて、末代まで此の道の師範とあふぐもことわり也。予又此の卿を以て、詠哥の規範とし、遠く哥道の師とあふぐ処也。（『あしわけをぶね』）

……かへすがへすも定家卿の哥にまさるものなければ、これを尊信して、為家以後の哥には、目をかくべきことにあらず。……（同）

……よつて詠哥はとほく定家卿を師として、そのをしへにしたがひ、その風をしたふ。哥学はちかく契沖師を師として、その説にもとつきて、その趣にしたがふもの也。（同）

近きころ、万葉ぶりの哥をもものするともがら、みだりに心高きことをいひて、俊成、卿、定家、卿などの哥をば、いたく拙きやうに、たやすげにいひおとすなるは、世の哥よみどもおしなべて、神のごとたふとみかしてむを、ねたみて、あながちにいひくたさむとする、みだりごと也。そもそも此の卿たちの哥、あしきこと

も、たえてなきにはあらざれど、すべてのやう、いにしへより世々のあひだに、抜け出たるころありて、まことにいとめでたし。しかいひおとすともがら、いかによむとも、足許へもよること能はじをや。

(『玉かつま』)

このように、宣長が定家を模範としているのは、いうまでもなく、その『新古今集』讚美と切り離し得ない。そして、彼が『新古今集』をよしとしたのは、それが花実相兼の歌集で、整つて見たと見たからである。

新古今を花のみにて実すくなく、哥の風あししといふは、哥をえみわけぬものの心得ちがへていふことなり。大なるあやまり也。新古今のよき哥どもは花実あひぐしてもつともめでたきもの也。(『あしわけをぶね』)

さて新古今は、此の道の至極せる処にて、此上なし。上一人より下下まで、此の道をもてあそび、大に世に行はるること、延喜天曆の比にもまさりて、此の道大に興隆する時也。凡そ哥道の盛なること、此の時にしくはなし。哥のめでたきことも、古へのはさるものにて、まづは今の世にもかなひ、末代まで変ずべからず。めでたくうるはしきこと、此の集にすぎたるはなし。凡そ万の事なにごとも、世世をへて全備すること也。聖人のをしへなども、三代の聖人をへて、周に至て全備せむごとくに、此の道も世々をへて、新古今に至て全備したれば、此の上をかれこれいふは邪道也。(同)

……その間に新古今集は、そのころの上手たちの哥どもは、意も詞もつづけさまも、一首の姿も、別に一つのふりにて、前にも後にもたぐひなく、其の中に殊によくとのひたるは、後世風にとりては、えもいはずおもしろく心ふかくめでたし。そもそも上代より今の世にいたるまでを、おしわたして、事のたらひ備りたる、哥の真盛りは、古今集ともいふべけれども、又此の新古今にくらべて思へば、古今集も、なほたらはずそなはらざる事あれば、新古今を真盛りといはんも、たがふべからず。然るに古風家の輩、殊に此の集をわろくいひ朽すは、みだりなる強ご也。おほかた此の集のよき哥をめでざるは、風雅の情をしらざるものこそおぼゆれ。(『うひ山踏』)

しかし、『新古今集』の歌がしばしば陥つた弱点についても宣長は認めていたので、そのことについては、さてかくの如くにめでたき集なれども、あまりに道の頂上へのぼりたるゆゑに、その中にはあらぬさまに、よこしまになること多くして、大に古への心を失ひたること多し。此の時、君も臣もまことに身をあはせたるときに、われもわれもと粉骨をつくすほどに、名人多きことも、此の時にしくはなし。さればその名人とても、哥ごとに秀逸はいできがたきものなるに、すぐれて人にぬけいでて、よまむよまむとするほどに、ことやうなることも多し。（『あしわけをぶね』）

但し此の時代の哥人たち、あまりに深く功をめぐらされたるほどに、其の中に又くせありて、あしくよみ損じたるは、殊の外に心得がたく、無理なるもおほし。されどさるたぐひなるも、詞うるはしく、いひまはしの巧なる故に、無理なる聞えぬ事ながらに、うちよみあぐるに、おもしろくて捨てがたくおぼゆるは、此のほどの哥共也。（『うひ山踏』）

というように指摘している。そして、後世の歌人たちがそういう弱点に陥らないようにするためには、『新古今集』を直接に学ばずに『古今集』ないしは三代集を学ぶのがよいとしている。

まことに哥は古今三代集に過ぐることなき也。哥学のためには万葉才一なれど、詠哥のたつきには三代集には及ばぬなり。万葉をまねてよまむとするは大なるひがごとなり。三代集をずいぶんまねてよみつくれば、当世でうどよき哥になる也。段々力のいでくるほど、おのづから花はいやともいできて、よき花実具したる哥になる也。新古今の哥のめでたきも、古風に心をそめてよみたるものゆゑ也。（『あしわけをぶね』）さて新古今に少しにても似よりて、よき哥よまむとならば、三代集をずるぶん学ぶべし。これ肝要也。そのゆゑは、新古今時代の名人、いづれもみな三代集を手本にしてよめる中にも、定家卿のをしへに、心を古風にそめよ、三代集を手本にせよとのこと也。三代集をよくよく学べば、おのづから風体よくして新古今に似よりたる哥になる也。即ちその時代の人人が証拠也。そのころの人々三代集によれるゆゑに、その哥すぐれたる也。（同）

新古今の哥をまなびては、新古今よりおとりたる哥ならではよみがたし。されば新古今の哥ほどにもすぐれてよまむと思はば、三代集に心をそむべし。即ち新古今のころの哥仙みな三代集に心をそめたるもの也。これあきらかなる證也。(同)

以上のような宣長の論には、いうまでもなく、さらにその基礎となつてゐるもの、すなわち、その和歌観があつた。

見るもの聞くものにつけて、思ひをのべ、うつりかはる折り折りの景色を、興あるさまによみつづけたる、此の世のありさま、何事かはおもしろからざらん。いとたけき猪のたぐひも、ふするのとこといへば、あはれになつかしきといへる、古るめかしきことなれど、まことに此の哥の徳ならでは、いかでかかく優にやさしく言ひなされむ。いはむや上なき花月のながめ、心にあまる風情、ふつつかなる口にも、一首につづりて言ひのべたらむは、いひしらずあはれに艶なること、何事かはこれに及ばむ。(『あしわけをぶね』)

和哥はもと本情をのぶるものなれば、はかなくしどけなく、おろかなるべきことわり也。(同)

夫れ和哥の本然といふものは、又神代より万々歳の末の世までもかはらぬといふ処ありて、人為の及ばぬところ、天地自然のこと也。そのわけは、まづ哥といふものは、心に思ひむすぼるることを、ほどよく言ひ出て、その思ひをはらすもの也。されば人心おなじからざること、其の面の如しにて、人々かはりあり。思ふ心千差万別なれば、よみ出る哥もことごとくその心にしたがひてかはりある也。(同)

哥といふものは程よくとのひてあやあるをいふ也。(中略)あやあるとは、詞のよくとのひそろひてみだれぬ事也。(『石上私淑言』)

されば詩哥はこと書のやうに、とあらむかくあらむとよろづにつくろひかまへていふべきならず。ただよくもあしくも思ふ心のありのままなるべきことなるを、今の様に是は不可、それは近婦人といふ心ばへなるかしこき詩は、詩の本意にあらず。ただものはかなく女々しげなる此方の哥ぞ詩哥の本意なるとはいふ也。(同)

とまれかくまれ哥はものをあはれと思ふにしたがひて、よき事もあしき事も只その心のままによみいづるわ

ぎにて、これは道ならぬ事、それはあるまじき事と、心にえりととのふるは本意にあらざ。(同)

哥は、おもふままに、ただにいひ出るものにはあらず、必ず言にあやをなして、ととのへいふ道にして、神代よりさる事にて、そのよく出来てめでたきに、人も神も感じ給ふわがなるがゆゑに、既に万葉にのれるころの哥とても、多くはよき哥をよまむと、求めかざりてよめるものにして、実情のままのみにはあらず。上代の哥にも、枕詞、序詞などのあるを以てもさとるべし。枕詞や序などは、心に思ふことにはあらず、詞のあやをなさん料に、まうけたるものなるをや。もとより哥は、おもふ心をいひのべて、人に聞かれて、聞く人のあはれと感ずるによりて、わが思ふ心は、こよなくはるくることなれば、人の聞くところを思ふも、哥の本意也。されば世のうつりもてゆくにしたがひて、いよいよ詞にあやをなし、よくよまむと求めたくむかた、次才次才に長じゆくは、必ず然らではかなはぬ、おのづからの勢ひにて、後世の哥に至りては、実情をよめるは、百に一つもありがたく、皆作りごとになれるなり。然はあれども、その作れるは、何事を作れるぞといへば、その作りざまこそ、世々にかはれることあれ、みな世の人の思ふ心のさまを作りいへるなれば、作り事とはいへども、落つるところはみな、人の実情のさまにあらずといふことなく、古への雅情にあらずといふことなし。さればひたすらに後世風をきらふは、その世々に変じたるところをのみ見て、変ぜぬところのあることをばしらざる也。後世の哥といへども、上代と全く同じきところあることを思ふべし。

(『うひ山踏』)

これらの言によつてわかるように、宣長が歌に求めていたものは、「思ふ心のありのまま」と「あやある」ととであつた。この二つは、矛盾することなく、一首のうちに存在すべきものとして、宣長の心のなかに想定されていたのであつた。しかも、情は自然にそなわつてゐるものなのであるから、詞を整えることこそ大事だと宣長は考えていたので、そういう詞の整つてゐる『新古今集』ひいてはその代表歌人としての定家を尊敬したのであつた。そのことを示している一つの事実として、『新古今集美濃の家つと』において宣長がしばしば用いてゐる批評の言に「めでたし、詞めでたし」という讃詞のあることが注目される。こういう角度から、彼は『新古今

集』に對し、そのなかでもとくに定家の歌を讃嘆しているのである。同書において、「めでたし、詞めでたし」「いとめでたし、詞めでたし」「いとめでたし、詞いとめでたし」と評された定家の歌は合計十三首あり、同様の評言を受けた他の歌人の歌数を計算してみると、俊成八首、家隆七首、良経四首、式子内親王・有家・雅経・通光各三首、西行・具親・俊成女各二首、寂蓮・宮内卿・顕昭・通具・秀能・業清・通親・公経・清輔各一首という結果が出てくるのであつて、定家の歌が群を抜いて多い。

宣長は実情主義の立場に立つて、象徴主義的傾向を本質としている定家の歌に對しているのである。宣長が敬意を表した定家作品のすぐれた技巧、表現力は、実情主義とは結びつかず、象徴主義的傾向と結びついたものであることに、宣長は注意していない。その点、彼は、重大な過誤を犯しているわけで、その定家理解は、本質をはずした矛盾性を蔵しているといわねばならない。そして、じつは、そのような宣長であつたからこそ、先に述べたように、定家のたとえば「駒とめて」の歌に對しても、そこに実情的なものを見ようとして、理解の浅さを露呈しているのだと思われるのである。

宣長は、また、為兼や『玉葉集』『風雅集』の歌風を、

為兼卿といふ人、冷泉家よりいでて、別に一家をなして此の道に名高し。此の人の哥はなほだ異風にして、風体あしし。そのころもつばら此の道おこなはれたり。皇統も二つにわかれて、龜山院・後宇多院・後醍醐院、此の御一流は二条家の哥を好ませ給ふ。又、伏見院・後伏見院・花園院、此の御一流は為兼の御風也。よつて伏見院、為兼に仰せて、玉葉集をえらばしむ。さて又、花園院みづから風雅集をえらび給ふ。此の二集は伏見院御流為兼の風にて、はなはだ風体あしし。凡そ此の道古今を通じてみるに、此の二集ほど風体のあしきはなし。かりそめにも学ぶことなかれ。（『あしわけをぶね』）

というように、否定している。しかし、中世において、定家を深く理解したものは、為兼や『玉葉集』『風雅集』の人びとであつた。宣長が初心者の心得として、

初学の輩のよむべき手本には、いづれをとるべきぞといふに、上にいへることく、まづ古今集をよく心にし

めおきて、さて件んの千載集より新統古今集までは、新古今と玉葉・風雅とをのぞきては、いづれをも手本としてよし。（『うひ山踏』）

といったのは、納得できることであるが、初心の域を脱したものの言としても、定家を推賞しながら、為兼や『玉葉集』『風雅集』の歌風を否定していることは納得できないことであつて、このこともまた、宣長の定家理解の浅さを示していることだといわねばならない。もつとも、以上のような宣長の見解に、われわれは、わが国の歌論の正統的性格の近世における一つの現われを見ることができるといふことは、付記しておきたい。宣長の定家評としては、なお、荷田在満の『国歌八論』に宣長が加えた評があるので、在満の言とともに、次に引用しておく。

後鳥羽・土御門のころに至りて、定家卿といふ人の出で来りてより後、今の世に至るまで、かの歌学者流の人、いかなる故によりてか彼の卿を歌の聖の如くに尊信す。然れどもかの卿歌学を得たりとも見えず。（評、誠に聖なり、歌学は得ず。）いかにとなれば、古歌の意を得ず、古語の義を誤れること、かの卿の歌および記せるものにて見つべし。多端なればここに略す。……

かの卿（注、定家をさす）の書かれたるものは仮字づかひ多く違へり。……また詠まれたる歌の中にまま仮字ちがひの歌どもあり。然るを後人、定家卿を尊信し、その誤れる仮名を準側とす。……仮字を知らざれば古歌を解するに必ず誤りあり。かの卿の歌学を得ざること知るべし。（評、定家卿は末代まで宗匠と仰ぐ故に、世間のすべての罪をもかの一人に負せて論ずるか。さらばこの論免すべし。もし然らずば此の如き種々の誤りは彼の卿一人に限らず、夫より稍前つ方より世間おしなべて誤り来れることにて、誰ありて一人其の誤りを知る者なし。されば彼の卿の罪にあらず、世間一同のことなり。）しかのみならず、後人偽作する所の書も定家卿の名を冒して杜撰甚しきものあり。然るに、多くはその真偽を弁まへず、数百年來妄りにかの卿を尊信して、かの卿の筆する所とさへいへば国史万葉等よりもこれを証とし、長く琴柱に膠してその上世に復り替ふることを知らず。（評、誠に歌学の大厄なり。）歌学の明らかならざる本これに由れり。

(評、最大厄なり。)……然るを世人、定家卿を尊信するの余りに、後京極の歌の絶妙なる事を知らずして、その意これを定家卿の左に序づ。かの卿の歌、いづれの歌かすぐれて感慨なる、いづれの歌か至りて秀絶なる。見つべし、歌合にかの卿の歌負け多きことを。その父俊成卿に比すれば、劣れること甚だ遠し。(評、父に優ること一等。)余が私意を以てこれを序づれば、後鳥羽院家隆卿等かの卿の上にある。然りと雖もこれまた各々の執する所にあるべければ強ひてはらず、汝は汝たり、我は我たらんのみ。(評、近代の弊を正さん為に定家を貶すること実に過ぎたるは又古学の弊なり。歌学は実に取るに足らず、詠歌は古今独歩の人也。いかでか後京極に劣らん。彼の卿の歌感慨なくば後京極の歌も感慨なかるべし。後京極を信じながら彼の卿を信ぜずといふは予は取らず。)

右に見られるように、宣長は定家の歌学には誤りが多いことは認めているが、その歌は「古今独歩の人」とまです賞讃している。

さらにまた、宣長が古今の歌のなかから秀歌と思うものを撰した『古今撰』(その総歌数は千三百五十七首)においても、定家の歌は最も多く撰ばれている。小原幹雄氏の調査(『島根大学論集』才十一号所載「本居宣長の藤原為兼評」)に従つて、作者別に歌数の多いものをあげると、定家百十四首、俊成四十六首、良経三十六首、家隆三十四首、貫之二十八首、西行二十五首、俊成・雅経十八首、業平十七首、躬恒・後鳥羽院・寂蓮十六首、慈鎮・俊成女十四首、人丸・順徳院十三首、式子内親王・有家・為氏十一首、素性・為家十首というようにつづき、定家の歌数が群を抜いている。

以上、要するに、宣長が定家を古今の歌人中、才一に尊敬していたことは疑いを容れないが、その本質を十分に理解した上での尊敬であつたとはいひ得ないのである。

その他の定家評

宣長の定家理解すらも、先に見てきたごときものであつたのであるから、近世における、その他の定家理解の

程度は、推して知るべきであろう。『尾張廻家苞』の著者、石原正明なども、同書のなかで、定家の、
 都にも今や衣をうつ山夕霜はらふ萬の下道

という歌に触れて、「かやうのすちをたくみなりとて学ばんには、其の歌左道になるべし。」と述べているのであつて、定家の歌を作歌の規範として全面的に支持していたのではない。

その他、伴資芳の『国歌八論評』にも、

定家卿の歌は、父の卿われは肉を詠む、かれは骨を詠むとのたまひしは果して然るや否や。或は定家卿を信ずるものの構へ出だしたる言か知るべからず。この卿もとより大家にて、いづれのいかなる趣向をも自由にあつかひたるには論なし。いかがはせん、ことむつかしくさはやかならぬ歌の多きは。後に為兼卿の玉葉集もこの余殃と見え、徹書記などもこの卿の趣きに倣ふとなれば、学ぶべからぬさまにこそ。但しわが輩の力及ばず、眼識なきにもあらんなれども、ここに在満ぬしのいへるもまた同じければいふなり。

とあつて、否定しているし、実情主義的立場を取つて、「古今集など皆調ととのへる歌にて侍り。御熟考あるべし。新古今など、皆しらべのたがひたるのみにて侍り。これまた御勘考あるべし。たとへて言はば、古今は自然の花也。新古今は、枝をため葉をすかしたる花也。」（『信濃国藤木光好が詠草に』——『和歌叢書』第七冊『和歌作法集』所収「桂園大人詠草奥書」のうち）という古典和歌観を抱いていた香川景樹が、「西行は俊成定家の両卿も上座を譲られし人也。」（「ある法師の詠草に」——『續日本歌学全書』第五篇所収「随所師説」のうち）とし、

俊成卿、調を知るに似て、猶向上の趣をば得ず。とる所や、誤るもの多し。風躰抄に古今を評する所得たりとせず。されども生涯未学び得ざる事を知りたる人也。定家卿は既に得たりとせる、是父子の卿たがへる所也。（『續日本歌学全書』所収「随所師説」）

新古今の歌、又、定家卿の歌の感は、芝居の感なり。此芝居の感も、人を泣かしむるものなれども、実事実景の感とは、いたく異なり。芝居中の日月を見ずして、四條大路の日月を見るべし。（『續日本歌学全書』）

第五篇所収「桂の下枝」中の「東塙遺言抄」による)

と考えていたことも、当然であろう。右の最後の言のごとき、さすがに景樹は定家の歌の本質的な一面を相当するべく突いており、しかもそれを否定しているといえるものである。

貝原益軒の『和歌紀聞』富士谷御杖の『歌袋』近藤芳樹の『寄居歌談』等にも、定家評は見られるが、そのうち『寄居歌談』には、次のような言が見られる。

この卿、仁治二年八月二十日に薨じ給へり。その年よりさかのぼりかぞふれば、初学百首よみ給ひし養和元年は十九歳なり。「をしむにも心なるべきたとさへ花のなごりはとまらざるらん」「天の原おもへばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ」などいふ歌どもも、此の時よみ給へり。はたちにもみち給はで、かかる秀逸をつづり給へる、まことに凡夫にてはおはしまさざりしなるべし。

歌よむに道を学ぶと風を学ぶとのけぢめあり。新勅撰は京極黄門の撰び給へる集なれど、その歌どもを見るに、彼の卿の執し給へるさまはをさをさなく、ただすなほなる言の葉どものみにてみづからのさへ拾遺愚草のたくみにめづらしき姿なるをばいれ給はず、これ道はおはやけなるものなれば、おのが姿にのみおもむけんとはし給はぬひろき心より撰び給へれば、私をもてまげ給はぬなりけり。

右の文中の十九歳とある年齢は、二十歳とすべきであるが、それはともかくとして、この言は、近世の定家理解解としては、相当に深いものというべきである。しかし、自らの実作に影響を受けるといふような形での理解は、ここでもやはり乏しいというべきであろう。

結局、定家は、近世和歌がその本質としていたところからは無縁の存在であつたのであり、近世においてはいづれの歌人からも、十分に理解されなかつたのだといえる。